

## 会員からの提言

### テキスタイル気分工学のすすめ、あるいは テキスタイルデザイン教育のリ・デザインの緊急性 野末和志

「FICテキスタイル・スクール」(開講11年)を創設したり、「テキスタイル&カラー塾」(開講2年)を開講して、プロの養成活動を、本業のデザイン・マネジメント・コンサルティションのかたわら行っている筆者の緊急提言。

#### ■クリエイションもアートも大切ですが

服地、ホームテキスタイルのデザインを伝習する場が日本にはない。「テキスタイル」「染織」を冠するコースの教育内容は、染織手工芸、造形、ファイバーワークなどであって、日常生活が必要とされ、多用されている服地やインテリアテキスタイルを真中にすえて教育してはいない。

「実務教育は、大学、短大、専門学校のことではなく、企業が行うべきだ。就業してから学ぶべきだ。」と決めつけているような感じがする。このような状況下で卒業した者を、企業が筋の通ったやり方で教育できるか、となると、殆どできない。「OJTでやっている」との答があっても、実際は行き当たりばったりで、プロ育成のプログラムなど持ちあわせていないのが実際だ。「やっておぼえろ」式だから、育成の効率と効果は低い。

それに、今日の企業は、新卒者が一人前に育つまで待つだけの気持の余裕を失っているし経済負担に耐えない。そこで、既にエキスパートである者を雇う傾向にある。鍛えられてもことなく気儘に過ごした学校生活の結果は、就職難の渦中に身を置くだけである。運よく就職できても、かつてのように沢山の失敗の経験から育つといった状況は無い。企業は無駄を減少させようと、仕事をエキスパートに集中させるから、新人が成長できるチャンスは低減している。エキスパートにはノルマが課せられているから尚さら新人の面倒にまで精力をさけない。このような状態は、エキスパートの激減となって、近いうちに表面化するだろう。筆者の廻りを見ても、同世代か、次の世代までにはエキスパートはいるが、その後の世代に姿を見つけないからだ。先輩達の幾多の経験から得た技術、技能の伝習はできなくなるだろう。近い日に、日本のテキスタイルデザインが、低レベルへところろ落ちるだろう。イタリアや中国などに負けるわけだ。日本に1校位、実生活に必要なテキスタイルのデザイン教育をするところがあればよい、と思う。

私の2つの学校は、こうした状態に対してのささやかな意思表示なのだ。FICテキスタイルスクールは、東京ファッション・インフォメーション・コミティの主催、東京繊維協会、東京繊維卸商業組合の後援で、今日までに約2,500名の履修者を業界に送り出している。講師陣は現役のエキスパートが約20名である。テキスタイル&カラー塾は、今日までの履修者は50名で、文化服装学院、日本アパレル産業協会のサポートを受けて行っている。講師は2名である。今秋も10月から「服地の気分」と「配色術」の2コースが始まる。

#### ■身体つきから目に入る

「グラマーだ」「スリムだ」と、他人との出会いの印象は、その人の身体全体の感じから始まる。その人ち近くなるにつれて、目鼻立ちが目に入ってくる。大きな瞳、きゅっとしまった口唇、鼻筋の通った面。そのうちに、艶のある色白な肌である、とか、産毛のある柔らかい肌であるなど、肌理を知るようになる。目ばりを入れているナ。アイシャドウは紫で。ほおべには淡いピンクがうすらといった化粧が分かってくる。

身体つき(ボディ)→目鼻立ち(ルックス)→肌理(きめ)(スキン)→化粧(メイクアップ)この順序は、服地、ホームテキスタイルに対しても同じである。

ボディ→地合い(組織、糸配列、表面効果、色沢、毛羽、材質など)→色柄

したがって、テキスタイル・デザインにとって大事なものは、色柄よりもボディである。ボディ感がよしとなってはじめて、それを活かす色柄を考えることになる。服地づくりでいえば、ボディの創作がデザインの最大目標になる。ボディづくりに成功することによって、色柄の道がひらかれるわけだ。だから、白生地を創作することを第一の目標としないようなテキスタイル・デザ

イン教育は、評価するに値しない。

#### ■生地幅で、1m長の布でなくては

布地のボディ感をみるには、最少でも生地幅で1m長の大きさが必要である。この大きさを、垂らしたり、引っ張ったり、振ったり、撫でたり、バイヤスにしたりして、その布地の表現性を感得するのが、実際的である。したがって、記念切手位の大きさや名刺大、大きくても週刊誌大では役立たずである。それらの大きさでは、組織、糸配列、糸縫い位しか分からないからである。それでは、仕立てたときの状態も、着たときの動態も分からないからだ。カーテンにしたとて同様である。

話し言葉や文字で布地の表現性を表わすことはできない。したがって伝えることもできないし、その感じを他人と共有することは不可能である。布地は、適切な大きさや状態でみたり、触れることなしに理解することは不可能である。前述の2枚の教材は、生地幅で1m長を、10セット用意している。

#### ■繊維気分工学、表現材料学のすすめ

衣服は布地で作る。布地は繊維で作られる。だから、繊維を着ている。だから、繊維の知識を得ればよい。という結論を引き出す。あるいは、繊維を紡いだり、織編したり、染色仕上加工して布地にするのだから、繊維工学を教えれば、服地、ホームテキスタイルが分かったことになる。この延長上で、化合織メーカー、紡績の社員を講師に招いて、話をきけばよい、といった状態が続いている。

作業服や着ればよいとする衣服や、かつこうさえすればよいとするホームテキスタイルならともかく、おしゃれな衣服であれば、人は繊維で作られた布地を着ているのではない。趣味のいいインテリア空間であれば、繊維を使った布地で装っているのではない。気分を着ているのだ。気分が装っているのだ。気分は布地を借りて現われるのである。服地は繊維で出来ているとは、服地の物としての側面しかみていないということである。いいかえれば、服地をみていない。今日大事なことはモノに依って表現されるコトである。糸を織って作った織物が衣服になれない、あるいは衣服になったが、腕を通してもらえないモノはゴロゴロしている。それは、機屋が作った織物、ニッターが編んだジャージー、テキスタイル・デザイナーの思い込みで作った布地などにみることが出来る。

服地は仕立て映えでまず判断され、着映えで評価される。服として着られ、その動態で現われるシェイプ、雰囲気、ひだ、しわ、ドレープ、重なり、衣摺れ、着心地によって良し悪しは決まる。気分によってである。意図する気分をどのようにして作り出すかが、服地、ホームテキスタイル・デザインである。その具現は次の3つの要素の組合せによってなされる。

- ①どのような原材料を用いるか。すなわち、ある状態の、繊維、スライバー、糸、燃糸、生機、生地、製品反などの選択、あるいは創作である。
- ②どのような仕方で行うか。すなわち、繊維の作り方、繊維の取り出し方、採取の仕方、織糸、編糸への仕方、組織、糸配列、織機の操作、下晒しの仕方、リラックスのさせ方、染色の仕方、仕上加工の仕方、生産形態などの取捨・選択と組合せ、創作である。
- ③どのような色柄を与えるか。すなわち、柄や配色の表現内容と質である。柄とは無色有色、浮き彫りなどの模様である。

これらの3要素は、Willの明確度合によって、取捨選択、組合せされ、技量程度によって、デザインの質を表わす。

ともあれ、①と②とをしっかりと分かっていなくては、成り行きまかせになってしまう。スタイリングの域に達するなど到底できない。企業が、新卒者を避ける理由はここにある。ところが、学生も教育者も分かっていないらしい。コンバーターやホームテキスタイルづくりを業とする企業で仕事を長年していると、こうした不幸な事態を打開したいと思うようになる。そこで、仕事仲間と共に開いているのがFICスタイル・スクールである。テキスタイル&カラー塾は、小売販売の観点からこれを行うものである。